

<CIEC 第 53 回研究会報告>

テーマ：iPod の教育への活用・実践そして可能性

日時：2005 年 6 月 18 日（土）13：30～17：00

会場：東京オペラシティタワー48階 アップルセミナールーム

司会：吉田晴世（大阪教育大学）

今回の研究会は、本学会の団体会員と個人会員との研究における連携を深めることを目的として企画されました。

「iPod」はアップル社のハードディスク内蔵の携帯 MP3 プレーヤー。この iPod 携帯音楽プレーヤーは、教育現場で、特に英語教育への応用という面で活用されて、利用範囲が拡大されつつあります。教育の現場で iPod がどのように活用されているかの事例として、大学英语教育に活用して成果をあげている実践例のご発表と、大学の e-learning 環境の中でどのように iPod/iTunes を教育利用しているか、また今後の可能性などを含めてのお話をいただきました。

最初に、アップル株式会社の小西氏（プロダクトマネージメント担当）は、「iPod は日本で発売されてからかなり広く普及してきた。それは現在のデジタルライフスタイルに合うものであり、デザインのシンプルさやファッションの一部として身に着けても違和感がないほどの評判を得ている。更に、iTunes により music store で音楽が買えるようになった。iTunes によりコンピュータへはケーブル一本でつなげるも特徴としている。これは使いやすさを念頭に置いたもので、それに加えてアクセサリが充実していることも使用者が増加している理由であり、更なる展開として、教育の分野で利用できるのではないか。当初は価格の面で高いというイメージであったが、今は買い易くなっている。」と解説しました。

次に、エデュケーション本部の平野氏は、「教育現場の導入事例を中心にお話をさせていただきたい。Mac や iMac を導入している学校や愛好者からの問い合わせが多い。学校等では iPod にコンテンツを入れた上で、利用してもらっている。この形としてコンテンツを入れて販売しているところもある。教育に利用できる特徴として、音声データのインストールがとても簡単であり、データの一元管理ができ、学習に適した操作性、学内のデジタル・データをポータルサイトにインストールするなど等。」と述べ、また、大学等で iPod を利用している事例を具体的に挙げての説明でした。

「英語教育への iPod の活用とその実践」

大阪女学院大学国際・英語学部教授 加藤 映子

大学においては昨年 4 月に英語教育へ iPod を英語教育に導入した。短期大学では平成 15 年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されて、iPod mini を使用した英語教育を行ってきた。なぜ導入したかは、まずその背景を説明すると、1997 年にカリキュラムの改定を行い、英語教育における言語スキルの統合を目的として、それまでバラバラにやっていた授業内容を統合した。主な改定点は、コンテンツベースの授業、4つのユニットを設け、ユニットは内容を伴うものとし、トピックを設定してそれを追求しながら英語の力を付けていく（スキルと知の統合化）、チームティーチングを行う、などであった。

授業においては、それぞれの授業で行われていること、取り組まれていることなどを説明し、誰もが情報の共有ができるようにした。例えば、リーディングの授業では全体として今どんなことが行われているかなどの情報を伝えた。教材についてはもともと自主開発を行っている。

これらのことを踏まえて、カリキュラム改定を背景として iPod の英語教育への導入を考えた。英語教育での利用は、「操作性がよい、簡単に使いこなせることと Mac はもちろんのこと、Windows にも対応していること、準備等に時間が取られないこと、メンテナンスが容易であること、その上、デザイン性がよいので使い心地がよい」などである。

これまでリスニング教材などでは、学校で学習したことを家に持って帰る、また、家での復習、宿題をやって学校に持ってくる、などは従来型のメディアはなかなか難しいところがあったが、これは容量がとても大きいことでこのことが可能となった。さらに、メモ機能も利用でき、その上、ipod は外付けハードディスクとして利用できる。

次に、学生側から見てみると、「片手で操作できる、通学時間にいつでも利用できる、一人で発音などが練習できるのがよい、都合のよい時間に自由にできる、英語のダイアログを聞いていると覚えてしまう、音楽を入れて聞ける(学校では禁止)」などなど。教員側からは、「学生のリスニング力が上がった、発音がよくなった、英語を確実に聞いて練習していることが分かる、英語学習の音の学習の効果が出ている」などであった。

導入をしてから様々な問題が生じてくるかと思われたが、大きな問題はあまりなく、導入時に誤ってデータを消した程度である。これはサポート体制、CALL のスタッフがデータの管理、教材の作成(録音)などがしっかりしているからだと思う。

今後は iPod の新たな利用法として italk 機能の利用により、後で講義が聞ける、本を読んで入力して行ってこれを学生が聞けるようにする、などなどあると思う。

最後にお化粧している iPod を見ていただきたい。

「iTunes/iPod は e-learning 時代の学習ツールとなりうるか」

中部大学国際関係学部 尾関修治氏

・ 教具としての iTunes / iPod

カセットレコーダ(発表のために持参してきた)は便利であり、拡声装置の役目も果たし、しかもあらぬところに触ると動かなくなるというような破滅的な失敗を避けられるということもある。一方、iTunes / iPod を教具として利用することにより便利さが増した。今何を再生しているかがすぐ分かる、あと何秒で終わるかも分かる、再生速度も変えられる、オーディオブック形式にできる、メニューも見れる、情報量が多い、プログラマブルな再生機である、など便利な教具である。これに関わりがあるのは、音声教材の配布に関わる著作権の問題である。

・ 音声教材ブラウザとしての iTunes

iTunes は「ブラウズ」機能とインクリメンタル・サーチができるなどの両方を備えていて、検索能力が抜群である。しかし、残念なことにその機能が iPod 側にはない。音声教材を提示するときにプレイリストによって再配置が可能であり、再生した回数等の記録も見られる、on-the-go リストやスマートプレイリストの作成などができる。作成したプレイリストはネットワーク機能の利用により公開することも可能である。注意しなければならないのは音声教材の複写によって生じる著作権であり、持ち帰って聞くのは著作権上の問題が起こる。

・ e-learning で大切なもの

「いつでもどこでも学べる」というのは e-learning の狙いである。しかし、いつ学ぶか、何を学ぶか分からないこともあり、情報を小出しにすることも必要であり、情報をぶつ切りにするとみんな案外とついて来てくれるということもある。どのように情報をコントロールするか、教材をどう配置するか、また、いつ教材を配信するのがよいか。いつアクセスさせるかである。今までのコマの概念が崩れるので、求める[深さ]は個人により異なる。情報の相互リンクが必要であるが、[誰が学ぶか]という個人認証の問題が出てくる。

・ iPod に向く教材

iPod を活用する場合、教材として取り込むのに容易なのは、比較的短い音声で完結し、再生順序を問わない語学教材であり、プレイリスト再生に適している。さらに、文字や図版に頼らない朗読や話芸なども向いている教材と言える。

・ iPod での [メモ] と音楽ファイルのリンク

「メモ」(note)で HTML を使用できるようになっている。メモ相互、またはメモと音楽ファイルとリンクすることによる。音声による情報をナビゲートし、音声を埋め込んだ練習問題、今何を聴いているかを確認できるのは ipod の画面を見ながらできる。またメモだけ配布することもできる。

・Podcast について

RSS フィード (RDF Site Summary, または Rich Site Summary) によるコンテンツ更新通知と音声ファイル配布を組み合わせたものであり、差分(ファイル)を iPod に転送して聴く。ブログと組み合わせると楽に設置できる。

最後に、CD などにより教材を一括配布しているが、教具としての iTunes / iPod による教材の配布は e-learning 向きである。その上で、教材などは一定時間経過後に expire するような仕掛けがほしい。教科書にあまり依存しない耳から入る e-learning というのは使えるかもしれない、

質疑応答では、「教材作成の時間と負担」、「著作権について」、「倍速にするとリスニング効果があるか」、「情報、データを活かすようなネットワークを作ったらよい」などがありました。

最後になりましたが、今回の研究会にあたり、アップル株式会社より、アップルセミナーームの提供と参加者にはくじ引きでソフトや携帯ストラップ等の景品が提供されましたことにお礼申し上げます。

(文責：石川 祥一)